

没後50年

SAKAMOTO HANJIRO
Commemorating the 50th Anniversary of His Death

坂本繁二郎展

久留米市美術館では、洋画家・坂本繁二郎が亡くなって50年となる今年、「没後50年 坂本繁二郎展」を開催します。

坂本は、フランス留学までは牛を、帰国後は馬を、戦後は身の回りの静物を、最晩年は月をおもなテーマとして取りあげました。そのテーマの変遷には、時代の流れと自身の生活が反映されています。周囲に牛がいれば牛を、九州には馬がいたので馬を、描く馬がいなくなるとともに出歩く機会が少なくなれば身の回りのものを描くようになります。その芸術は、彼の人生の成熟とともに深まりを増しています。

本展覧会では、生涯描きつづけた静物画に特に注目し、彼の絵画が成熟していく過程を5章構成で紹介します。

▶ 見どころ

- ▶ 展示作品は総数146点、一部展示替えがあるため、常時約130点の作品をごらんいただけます。静物画は約60点展示します。
- ▶ 展覧会では、東京時代の牛、フランスでの風景画と人物画、九州にもどってからの馬、戦後の静物画と能面、最晩年の月、それぞれの時代の代表作がそろいます。
- ▶ 坂本少年に絵を教えた森三美(1872-1913)、坂本と同郷同年生まれの青木繁(1882-1911)の作品も紹介します。

▶ 本展に関するお問い合わせ



久留米市美術館

KURUME CITY ART MUSEUM
ISHIBASHI CULTURAL CENTER

展覧会・広報担当：森山秀子、中山景子

〒839-0862 福岡県久留米市野中町1015(石橋文化センター内)

TEL0942-39-1131 FAX0942-39-3134

展覧会名 没後50年 坂本繁二郎展

会 期 2019年4月6日(土)－6月9日(日)

出品点数 約130点

会 場 久留米市美術館

主 催 久留米市美術館、毎日新聞社、RKB毎日放送

特別助成 公益財団法人石橋財団

後 援 久留米市教育委員会

入 館 料 一般 1,000円(800円) シニア 700円(500円)
大学生 500円(300円) 高校生以下 無料
※()内は15名以上の団体料金、シニアは65歳以上。
上記料金にて石橋正二郎記念館もご覧いただけます。
※4月26日(金)の石橋文化センター開園記念日と
5月5日(日)のこどもの日は、入館無料

休 館 日 月曜日(ただし、4月29日、5月6日は開館)

開館時間 10:00－17:00(入館は16:30まで)

交通案内 JR 博多駅よりJR 久留米駅まで
新幹線で20分、快速で40分

福岡(天神)駅より西鉄久留米駅まで
特急で30分、急行で40分

▶ 展覧会の構成

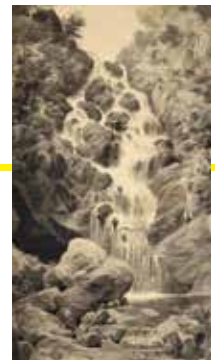
第1章 1897 - 1902年

神童と呼ばれて

久留米の洋画家、森三美(1872-1913)の画塾で学んでいた頃のこと、同郷・同年生まれの青木繁(1882-1911)と共に上京するまでを紹介。



①坂本繁二郎《夏野》1898年



②坂本繁二郎《立石谷》1897年頃



③坂本繁二郎《張り物》1910年



④青木繁《朝日(絶筆)》1910年

第2章 1902 - 1924年

青春—東京とパリ

東京で共に過ごした青木のこと、1911年の青木の死を契機に自らの芸術に邁進していく坂本の姿を紹介。日常の光景と牛を描いた時代でもある。

坂本が留学した1920年代のパリは、若い芸術家たちの熱気であふれる時代でもあった。人物画と郊外の写生に没頭し、自己確立の手応えを土産に帰国する。

第3章 1924 - 1943年

再び故郷へ—馬の時代

留学から帰国後は郷里久留米に戻り、さらに1931年、八女にアトリエを構え、制作三昧の生活となる。馬と併行して静物画も増加する。



⑤坂本繁二郎《放牧三馬》1932年



⑥坂本繁二郎《林檎と馬鈴薯》1940年

第4章 1944 - 1963年

成熟—静物画の時代

坂本自身還暦を迎え、出歩くことが少なくなり、描くべき馬も減った結果、関心は静物画、なかでも能面に向けられる。表現はさらに深みを増していく。



⑦坂本繁二郎《能面》1955年



⑧坂本繁二郎《能面と鼓の胴》1962年

第5章 1964 - 1969年

月へ

次第に視力が衰えたことも原因だと思われるが、月を描くようになる。そこにはかつて見た馬や風景がともに描かれる。



⑨坂本繁二郎《馬屋の月》1967年



⑩坂本繁二郎《櫃の月》1967年

坂本繁二郎について

坂本繁二郎は、1882（明治15）年、福岡県久留米市京町に生まれました。幼い頃から絵が好きでうまく、周囲からは神童ともてはやされたといひます。森三美の画塾では、先生の信頼も厚く、助手を務めるほどでした。その同じ画塾には同年生まれの青木繁も遅れて入ってきました。やがて、東京美術学校に学んでいた青木の上達ぶりに触発され1902（明治35）年、坂本も上京を決意します。

東京では、画塾不同舎、その後太平洋画会研究所に学びます。《うすれ日》が夏目漱石の目にとまり自信を得るのが1912（明治45）年、青木はその前年に九州放浪の末病死しています。文展での入選・入賞を重ねていた坂本ですが、洋画団体・二科会に誘われて会員となった後は、二科展をおもな発表の場としました。1921（大正10）年から約3年間、フランスに留学、帰国後は家族の待つ久留米に帰ります。その後、1931（昭和6）年に八女に転居し、自宅から約1キロ離れた場所にアトリエを建て、毎日通って制作に没頭することになります。馬や静物画、そして能面の名作はここで生まれました。

80歳を超えた頃から、自宅の2階をアトリエにおもに月を描きます。1969（昭和44）年7月14日、家族に見守られその生涯を終えました。晩年テレビや新聞の取材陣に対し、「一生絵をかいて生きてきたことを、しあわせに思っています」、「生まれ変わっても画家になりたい」と語った言葉は、彼の充実した画家人生を物語っています。



関連事業

ギャラリートーク

日時 | 毎週土曜日(5/25を除く)、日曜日(4/14を除く)
14:00より約20分間。

担当学芸員によるギャラリートーク

日時 | 4月14日(日) 14:00-14:40
集合場所 | 本館2階エントランス

美術講座「坂本繁二郎の絵画世界」

日時 | 5月25日(土) 14:00-15:30 (13時30分開場)
講師 | 森山秀子 (久留米市美術館副館長)
会場 | 本館1階多目的ルーム
定員 | 70名

ワークショップ「はんじろうさんモビールをつくろう」

要申込

日時 | 4月27日(土) 午前の部/10:00-12:00 午後の部/14:00-16:00
講師 | オーギカナエ (アーティスト)
対象 | どなたでも (小学生以下のお子様は保護者同伴)
定員 | 各回20名
会場 | 本館1階多目的ルーム・展示室
参加費 | 無料 (但し大学生以上の方は観覧会チケットが必要)
※出来上がったモビールはワークショップ当日は持ち帰りできません。

申込方法

①-⑥をご記入の上、FAXまたはハガキで久留米市美術館ワークショップ係までお申し込みください(1通で2名まで申込可)。応募者多数の場合は抽選。

①参加希望時間帯②参加者人数③参加者氏名・年齢④郵便番号・住所
⑤電話番号⑥保護者氏名(参加者が小学生以下の場合)

締切: 4月2日(火) 必着 (結果は応募者全員に4月6日(土)迄にお知らせします)

インスタレーション「はんじろうさんの雲」

撮影OK

日時 | 5月11日(土)、12日(日) 11:00-15:00
アーティスト | オーギカナエ
場所 | 石橋文化センター内、坂本繁二郎旧アトリエ

《放水路の雲》など坂本繁二郎が描いた雲をイメージして、オーギカナエさんが、ワークショップで仕上げたモビールとバルーンで、坂本繁二郎旧アトリエ内を素敵な空間にします。



ワークショップ「はんじろうさんブローチをつくろう」

当日参加OK

日時 | 5月18日(土) 10:00-15:00
対象 | どなたでも (小学生以下のお子様は保護者同伴)
会場 | 本館1階多目的ルーム・展示室
材料費 | 1個100円 (ただし大学生以上の方は、材料費に加え、観覧会チケットも必要)

展示中の作品からお気に入りのを選び、プラ板でブローチに仕上げます。



石橋正二郎生誕130年記念事業

石橋正二郎
生誕130年記念事業

今年は、株式会社ブリヂストンの創業者で、石橋文化センターの寄贈者でもある石橋正二郎(1889-1976)の生誕130年という記念すべき年でもあります。本展をその記念事業のひとつとして、観覧会と石橋正二郎記念館を楽しく鑑賞いただくためのクイズシートをつくりました。クイズに答えただ方には記念のプレゼントがあります。

▶ 特別講演会&コンサート 日時 | 4月26日(金) 13:00開場/13:30開演 入場料 | 無料 会場 | 石橋文化ホール

